

「2023年度香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学法学部2年 井上 平世

1. 学習成果について

「なぜ中国語を勉強しようと思ったのか」、「なぜ（普通話が主流の）大陸ではなく（広東語が主流の）香港で普通話を勉強しているのか」。この二つの質問は現地学生との交流の中で度々投げかけられた質問である。一見答え易く感じるこの二つの質問に、意外にも、答えに詰まった。「1」ではこの二つの質問への答えを考える形式で、自身の学習態度への分析をする。「自身の変化」等の内容は「2」にもまたがるため注意されたい。

まず、前者の質問に対して答えに詰まる理由としては、明確な目的なく「中国語学習」というものに対して漠然とした価値をおき、それに身を投じていることで安心感を得ているのだろう。これは現代人全般に見て取れる傾向だと思う。例えば、書店に入ると「ビジネスのための教養」「スキルアップ」などをうたった本が一面に平積みされている。自己を他と差別化しなければならぬという焦りを感じる現代人たちの性向が見て取れる。また自分もそのほかならない一員であるということである。「外国語学習」という無難な手段により自分の「価値」を高め、他者と差異化しようという試みとして中国語学習があるといえる。当然、なぜ中国語を勉強しているか明確に述べられないはずである。

次に、後者の質問についてである。そもそも、中国語の普通話を体で感じるためには、大陸に行く方が適切な手段であるはずである。香港の学生もその点を疑問に感じたのであろう。ではなぜ香港で普通話を勉強するのか。それは、中国語を勉強するために香港に留学する必要があったのではなく、このサマースクールというプログラムを所与のものとして捉え、そこに受動的に参加したに過ぎないということである。

以上で見たような質問は、香港の学生の純粋な疑問から発せられたが、自分に対して批判的な分析を行うきっかけを与えた。ある場所では疑問を持たれないことであっても、外の世界から見ると不思議に思えることもある。自分の常識は他人の非常識というが大袈裟であろうが、多様な視点を得るために国際交流の重要性を感じた。

2. 海外での経験について

まず、自身にとっては2度目の海外渡航であったが、準備、体調管理、現地での学習どれも大きな失敗なく終えられたことは自信になった。また、言語の異なるルームメイトとの生活をつつがなく終えたこと、現地学生と交流をしてその場限りでない関係性を築けたこと、このような経験が海外に行くことへの心理的ハードルを大いに下げたことは事実である。

海外に行くということが自分の選択肢に加わった今、（1の3段落で述べたような受動的理由ではなく）、何か必要なもののためには躊躇うことなく海外へと飛び出していきたい。ただ注意すべきは、何もかも「目的」や「意味」を求めすぎること、かえって短絡的な取捨選択にもつながりえよう。その場の偶然に身を任せるという選択も大事にしていきたい。

3. プログラム内容

授業について、午前・午後3時間ずつの授業が週5回あった。また、課題や復習の必要があったことも考えるとかかり集中的に中国語を学習できた。授業・課題全て皆勤賞だったのは、授業の質の高さと同級生たちのモチベーションの高さによるところも大きい。

文化体験として、書道体験とシューマイ作り、ランタナオ島ツアーに参加した。

CUHK 歴史学科の学生とお互いの文化理解を促すセミナーが存在した（京大の学生のみ）。渡航前から準備をすすめ、プレゼンを行なった。自身の班は「京大の自由の学風」について発表し、私は「自由の学風の将来」として女性研究者・障害を持つ教職員・学生への支援の取り組みを紹介した。

4. 進路への影響について

2においても述べたが、海外へのハードルが下がったことは進路への影響が大きい。自身は法律家や研究者を目

<事務局使用欄> 受付番号:

-

指している。言語を超えて他者と交流できることはとても有意義に、そして何より楽しく感じた。自身の目標のために努力しつつ、国際的な仕事にも視野を広げることができるようこれからも励みたい。